

福井工業大学に赴任して

— 学問し続ける粘り強い人材を育てる。本居宣長の教育考 —



随筆

掛下知行*

New post at Fukui University of Technology in Fukui
- Developing and promoting prospective and continuous learning
by Norinaga Motoori's education concept -

Key Words : Fukui University of Technology, Historic Place, Norinaga Motoori, Education Concept

2018年3月に退職し、4月より、元理学部長の森島洋太郎先生の後任として、福井工業大学（福井市）の学長を務めさせて頂くことになりました。この大学は、1965年に創立し（現理事長 金井兼様）、これまで約2.5万人の人材を育成してきました。その多くは、冬の長い農閑期の収入源のため発展してきた多くのニッチトップな中小企業等の産業基盤はもちろんのこと県庁、銀行をはじめとする自治体基

盤にも輩出しています。開学50周年を迎えた2015年には、「工学部」（電気電子工学科、機械工学科、建築土木工学科、原子力技術応用工学科）、「環境情報学部」（環境食品応用化学科、経営情報学科、デザイン学科）、「スポーツ健康科学部」（スポーツ健康科学科）の3学部8学科および大学院（応用理工学専攻・社会システム学専攻 博士前期課程/博士後期課程）を備えるいわば工科大総合大学とし



* Tomoyuki KAKESHITA

1952年4月生まれ
北海道大学大学院理学研究科物理学専攻
博士前期課程（1978年）
大阪大学大学院基礎工学研究科物性物理学専攻博士後期課程（1979年、中退）
現在、福井工業大学 学長 理学博士
専門/材料科学
TEL : 0776-29-7874
FAX : 0776-29-7891
E-mail : kakesita@fukui-ut.ac.jp

て発展しています。北陸3県からの学生が7割を占めています。「教育第一主義」の大学で、学生の面倒見も良く、その結果就職率は99.6%（2017年）にも達し、全国トップクラスであり、2人に1人が上場企業・大手企業に就職しております。本学のキャンパスは、福井キャンパスとあわらキャンパスの2箇所に分散しており（メインは福井キャンパス）、ここにそれらの写真を掲載しました。

本学と阪大の関係はとても深いように思います。と言いますのは、森島先生の前の学長は元副学長・元工学研究科長・工学部長をなされた城野政弘先生、その前が工学研究科の故三宅正宣先生でした。私を含め4代にわたる学長の帯任期間は20年にもなります。また、教員の15%は阪大卒であるとともに阪大同窓会福井支部(会長 前田征利様)はとても活発なため、私は、この大学に初めて来たとは思えないような気がしております。それだけではなく、私が札幌出身のためでしょうか、北陸トンネルを抜けると雪国の気候になり、体に懐かしさを感じます。そのため、この地が初めて来た地とは思えないような不思議な感覚になります。しかしながら、本学のある福井市、福井県の歴史や現在の状況については観光地以外ほとんど知りませんでした(一乗谷、永平寺、大野城、九頭竜湖、平泉寺、丸岡城、東尋坊、恐竜博物館など)。そこで、赴任してすぐに私が好きな作家のひとりである司馬遼太郎の「越前の諸道」を読み、恥ずかしながらこの地が文化の豊かな国であることを初めて知りました。考えてみますと当たり前ですが、福井県が、中国・韓国から近い位置にあることを考慮しますと、それら大陸との文化交流があり歴史的背景を色濃くしていることは容易に頷けます。事実、武生(国府があった地 今は越前市)の周辺は、漆器、陶器(越前焼 六ヶ窯)、打ち刃物、越前和紙をはじめとする巧みな工芸品の産地であり、鯖江はご存知のように眼鏡のメッカの町です。また、池田町には能が定着した文化があります。さらに、歴史的に見ますと福井県は、古くから我が国の地方における知の拠点としての役割を果たして来たことではないかと思えます。具体的に述べますと、古来日本の精神的な中心は京都の比叡山を中心とする仏教でした。しかし、その中で道元禪師は、あえて京都から離れ、この福井に永平寺を開き、日本の新たな精神的な拠点としました。また、江戸時代には、前田利家の進出を阻むため親藩である松平家が治めていたこともあり、いわゆる城下町の趣があるとともに、橋本左内、松平春嶽、五か条御誓文の由利公正などの著名な人物を輩出しており政治的、思想的な地方の拠点となりました。現代でも素粒子物理学者でノーベル賞受賞者の故南部陽一郎先生、ニュートンの編集者であった地球物理学者の故竹内均先生を輩出するなど、その教育水準、知

的水準は非常に高いものがあります。このように福井県は文化の香りのする地であるとともに、白山を控え、星が輝く自然豊かな地であります。現在では、日本一暮らしやすい県であるとともに小中での教育が一番である県として知られています。

このような自然と歴史のある土地で育まれた福井工業大学に着任したことは、何かの使命であると思ひ、教育研究に大いなる貢献をしたいと強く思っております。

着任した日に、本居宣長の銅像が大学の校庭にあることを気づきました。筆者は長く教育にかかわってきたこともあり、大学時代に感銘を受けた本居宣長の教育考を思い出しました。そこで、自身にも再び言い聞かせることもあり、以下に少し紹介させていただきます。皆様に少しでもお役に立てると幸いです。

言うまでもなく、本居宣長はわが国の古代の歴史書である「古事記」という書物を読み解いて古事記伝をあらわしたわが国を代表する素晴らしい学者であります。もちろん本居宣長の学問分野は国学と呼ばれる分野であり、理学、工学、情報学等とは異なる分野であります。しかしながら、本居宣長の学問に対する考え方、学問の進め方、学問を始めようとする人への教育は、すべての学問分野に共通した普遍的なもので、かつ、非常に優れた考え方であります。こうした考え方は「うひ山ぶみ」という書物にまとめられています。

「うひ山ぶみ」とは、はじめての山、あるいは新しい山に登るという意味ですので、この本では、新しい学問を学ぶことを新しい山に登ることにとえています。

本居宣長は新しい学問を学ぶ方法として次のように述べています。「学問というものはただ長い年月飽きたり怠けたりせずに一生懸命続けることが大事である。勉強の仕方は人それぞれで、その人にあった方法を選べば良くそれほど気にすることはない。いかに良い勉強の方法を用いても、怠けて勉強に励まなければ学問の成果は得られない。また自分に才能がないとか、時間がないとかいったことであきらめてしまい、勉学をやめてはいけない。とにかく学問というものは一生懸命励めば成就するものだと思うべきである。あきらめは学問が大いに嫌うことである。言い換えると、山に登るとき、人それぞれに

あった登り方や道で登ればよいのですが、途中で飽きたり諦めたりしたら決して頂上にはたどり着くことは出来ない。学問も毎日こつこつと続けるのが重要である。」と教えています。本居宣長ほどの大学者でも日々努力して学問を成就したのです。このことを思うと、筆者には、身に染みる言葉と感じております。

また学問に対する態度について次のように述べています。「一つの分野の学問でも勉強することは非常にたくさんあり、それらをすべて学ぶことが出来ればよいが、人が一生をかけても無理である。そこで、その中から自分が極めたいと思うことを見つけ出して、それを力の限り勉強するのが良い。これも学問をする上で重要なことであり、人間の能力には限りがあるので自分が興味をもって、突き詰めたいことを決めて、一生懸命勉強するのが大事だ。」と本居宣長は教えています。

さらに、「こうした学問の進め方は、学問に志した方には自然に備わっているものなのですが、初めて学問をする人には、どのように勉強したらいいのかわからない場合が多い。そのときにはその学問分野を良く知る人に、十分に相談しながら勉強方法や、学ぶべき事柄などを教えてもらうのがよい。」と述べています。これは、まさに、大学の役割であり、また教員の役割となるものです。その指導に関しても、本居宣長は、「先生が「これこれこうして勉強しなさい。」と一つの方法だけを言うのではなく、その人にあった、その人の勉強と努力を最大限に生かして、学問を成就できる方法を教えるべきである。」と述べています。この本を読むたびに、忘れ

かけていた真摯な気持ちに何度戻ったか覚えていません。

本居宣長は最後に次のような短歌で締めくくっています。「いかならむ うひ山ぶみのあさごろも 浅きすそ野のしるべばかりも」この歌は「初めての山に登るにあたって麻の粗末な着物をまとい経験も浅い私の言うことが道しるべになれば幸いです。」というような意味です。とても謙虚な気持ちになり、心洗われる気がいたします。皆様はいかがでしょう。その上で、私には、皆様も良くご存じの天才画家パブロピカソの言葉を思い出します。「できると思えばできる、できないと思えばできない。これは、ゆるぎない絶対的な法則である。」ピカソの様な天才ですら、自らの芸術活動において、様々な課題に直面し、それを、このような考え方で乗り越えて、素晴らしい絵画を生み出してきたのです。ピカソほどの天賦の才能がないにしても、私たちも、常に、このような考え方、また、本居宣長の「うい山ぶみ」に見られる精神をもって、世界の持続的発展に貢献する研究成果を挙げるのが大切であると強く思っています。

最後になりましたが、教育は国家100年の計であると同時に人類100年の計でもありますことから、身を引き締めて慎重にきめやかに深化・展開すべきことであると考えます。言い換えると、教育こそが、今日の複雑な課題を解決するものであり、人類を救うものであると行うことができると筆者は強く信じております。新型コロナウイルスが早く収まることをお祈りし、筆を置かせていただきます。

